

芦屋大学論叢 第76号
(令和4年3月24日)抜刷

学校における柔道教育の在り方

—安全性の問題に着目して—

武 田 光 平
三 浦 正 樹

学校における柔道教育の在り方

—安全性の問題に着目して—

武 田 光 平
三 浦 正 樹
芦屋大学臨床教育学部

1. はじめに

武道必修化以前から、柔道授業に対する安全性に不安の声が聞かれ、メディアでも多く取り上げられている。また、2012年度より中学校保健体育教科で武道とダンス領域の必修化が始まったことにより、柔道の授業にはこれまで以上に安全に配慮した授業が求められるようになった。ところが、武道必修化後も柔道事故が発生し続けており、武道では環境の整備と指導教員の養成、安全への配慮といったところに多く問題を抱えている。最近では、柔道授業中の負傷事故に対する裁判も行われ、県に対して賠償命令が出された。この事故は、2013年10月に兵庫県の猪名川高等学校の柔道の授業中に、体育教員の指導の下、有段者で体重が被害者の倍ある同級生（106kg）と対戦し、無理な姿勢での攻防が続いた結果、男性が意識を失って倒れ、脊髄を損傷し、長期間入院する大けがを負ったもので、この事故に対して、神戸地裁は、2020年5月に、柔道経験や体格の差を十分に配慮せず、無理な体勢での攻防を漠然と見逃したことなどから、体育教諭の安全義務違反を認め、県に対して180万円の支払いを命じる判決を言い渡した。この事故のほかにも、多くの負傷・死傷事故が毎年起こっており、柔道授業の安全性を不安視する声はあがり続けている。

本研究では、学校における柔道教育の在り方を探るために、まず学校における柔道事故に関する先行研究についてまとめる。次に学校管理下における柔道事故について分析を加え、柔道指導の安全性について明らかにする。事故分析の方法としては日本スポーツ振興センター（JSC）が公開している「学校の管理下の災害」から抽出した、中学校・高等学校における柔道の授業及び部活動の負傷事故に関するデータをもとに統計分析を行う。そして、これらの文献研究、統計分析から得られた知見をまとめ、柔道教育のあるべき姿について考察しまとめていく。

2. 柔道事故に関する先行研究

2.1 死亡事故

内田¹⁾は、学校の管理下における柔道の死亡事故、障害事故の実態について明らかにしている。内田の調査資料によれば、学校管理下の柔道死亡事故は1983～2011年度の29年間で118件発生しており、内中学校が40件、高等学校78件である。また、学校管理下の柔道障害事故は1983～2009年度の27年間で275件発生し、中学校が92件、高等学校180件、その他3件となっている。また、他競技の事故発生率と比較し、柔道の危険性についても調査している。この調査は、2001～2010年度の10年間の主要部活動（陸上、水泳、バスケットボール、サッカー、野球、バレーボール、テニス・ソフトテニス、卓球、ソフトボール、柔道、剣道、ラグビー）の死亡件数と10万人あたりの死亡率を中学校と高等学校別にまとめられている。中学校に

においては、柔道の死亡数は12人で、死亡率が2.385人となっており、他と比べると突出して高い。柔道に次いで死亡率が高いのはバスケットボールの0.382人で、死亡数は最大の13人だが、死亡率については、バスケットボールの6.2倍である。高等学校においても死亡率は非常に高く、3.450人となっており、柔道は死亡に至る可能性が非常に高いことがわかる。このことから柔道は他競技よりも、安全面の配慮・対策が重要であることが読み取れる。

また、文部科学省が作成した「柔道の授業の安全な実施に向けて」²⁾の資料内で、学校管理下における事故に対する補償で、中学校や高等学校の授業や部活動に参加した生徒が対象となっている(独)日本スポーツ振興センター(以下JSC)の災害共済給付データを元に、柔道事故の現状が示されている。柔道の死亡見舞金給付件数の資料によると、1989年度から2009年度までは柔道の授業における死亡事故の報告はなく、死亡事故は発生していない。しかし、部活動では25件の報告がある。更に高等学校では、授業10件、部活動46件もの死亡事故が発生している。また、死亡事故の他に重度の障害事故(1級~3級)を加えた資料では1998度~2009年度まで中学校では授業2件(中1:2件)、部活動24件(中1:14件,中2:7件,中3:3件)、高等学校では授業7件(高1:1件,高2:4件,高3:2件)、部活動26件(高1:20件,高2:2件,高3:4件)の報告がある。これらの報告から、中学校・高等学校ともに1年生の部活動で重大事故が多く発生している特徴が読み取れる。部活動では、様々な体格や学年、技能レベルの生徒が混在しており、実戦形式の練習が多い。さらに、勝利の為に運動強度も高くなっているなど授業との違いがあり、柔道技術の熟練度が未熟な状態で、運動強度や高度なスキル・経験が必要な運動を行うことが、重大事故が起こる原因であると考えられる。

2.2 負傷事故

藤澤ら³⁴⁾は、JSCに依頼し、2009~2013年の中学校、高等学校における柔道の授業及び部活動の疾患を除く負傷事故に関する情報提供を受け、これらの報告から柔道事故の現状について明らかにしている。

藤澤ら³⁴⁾によれば、柔道の「部活動」の負傷事故については、高等学校の「部活動」の負傷事故件数は中学校の約0.7倍であった。また、負傷事故の上位3種類は中学校では骨折、捻挫、挫傷・打撲の順で多かったが、高等学校では捻挫、挫傷・打撲、骨折の順であり異なっていた。さらに負傷事故の上位3部位は中学校では下肢部、上肢部、体幹部の順で多かったが、高等学校では下肢部、体幹部、上肢部の順であり、それぞれの部位の中では、中学校は下肢部では足・足指部、上肢部では手・手指部、体幹部では肩部、高等学校では膝部、肘部、肩部がそれぞれ最も多かった。

次に、柔道の「授業」の負傷事故については、高等学校の「授業」の負傷事故件数は中学校の約0.6倍であった。また、負傷事故の上位3種類は中学校、高等学校ともに骨折、挫傷・打撲、捻挫の順であった。さらに負傷事故の上位3部位は中学校、高等学校ともに下肢部、体幹部、上肢部の順で、それぞれの部位では、下肢部では足・足指部、体幹部では肩部、上肢部では手・手指部の負傷数が最も多かった。

藤澤らの報告から、柔道授業における負傷事故は、中学校・高等学校ともに2年生で下肢の足・足指の骨折が多く発生している特徴がある。これは、授業内容が基本から応用に代わったことが原因の一つであると考えられる。また、柔道は対戦相手と至近距離でおこなう競技であり、技術の熟練度の低い者は、対峙者と足が接触することが多くある。また、すり足で歩く時に、足指が畳に引っかかることが負傷につながっていることもある。

3. 最近の事故の現状

藤澤らの研究は、2013年までの学校における柔道事故の傾向についてである。藤澤らの研究から数年経ち、新たなデータが利用可能になった。そこで、本研究では最新の柔道事故の現況を明らかにするために、藤澤らの研究と同様に、JSCが公開している「学校の管理下の災害（平成27年度版～令和1年度版）」⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾から、2014～2018年の中学校、高等学校における柔道の授業及び部活動の疾患を除く負傷事故に関するデータの抽出を行い分析した。

3.1 年次推移

抽出データによれば、中学校における、柔道授業での負傷者数は、9,341件(2014)、9,045件(2015)、8,697件(2016)、8,136件(2017)、7,475件(2018)で合計42,694件となっており、柔道部活動の負傷者数は、5,678件(2014)、5,537件(2015)、5,355件(2016)、4,926件(2017)、4,403件(2018)で合計25,899件となっている。また、高等学校における、柔道授業の負傷者数は、6,374件(2014)、6,317件(2015)、6,002件(2016)、5,825件(2017)、5,382件(2018)で合計29,900件となっており、柔道部活動の負傷者数は、4,274件(2014)、4,377件(2015)、4,078件(2016)、4,056件(2017)、3,899件(2018)で20,684件であった。どのカテゴリーにおいても、負傷事故件数は年々減少傾向にある(図1)。これは、文部科学省や全日本学生柔道連盟による安全対策の効果によるものであると考えられる。

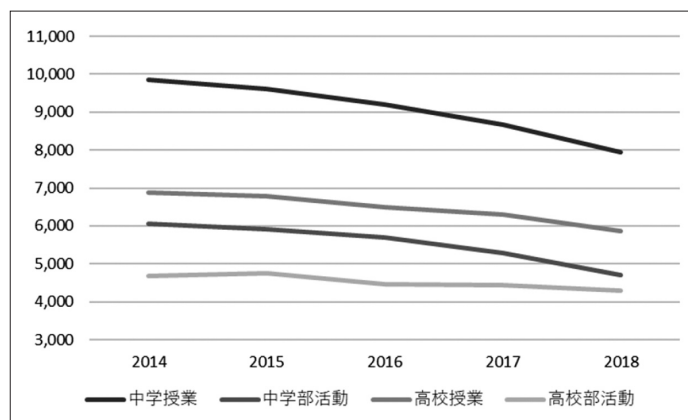


図1 事故件数の年次推移

また、2014年～2018年の事故件数減少率を各負傷部位ごとに割り出した。その結果、中学柔道授業(頭部-29%・顔部-25%・体幹部-19%・上肢部-18%・下肢部-18%)、中学柔道部活動(頭部-30%・顔部-31%・体幹部-23%・上肢部-18%・下肢部-23%)、高等学校柔道授業(頭部-30%・顔部-26%・体幹部-13%・上肢部-13%・下肢部-12%)、中学柔道部活動(頭部-23%・顔部-14%・体幹部-8%・上肢部-4%・下肢部-8%)であった(表1)。どの部位においても事故件数は減少しているが、頭部・顔部の減少率が特に大きくなっている。これは、頭部・顔部への負傷は、生命に直接関わる場合や重い障害を残す重大事故につながる危険性が高く。文部科学省や全日本学生柔道連盟の安全対策においても、これらの部位への、対策が重要視されている。この為、教員・指導者の対策意識も高くなり、減少率の増加につながっていると考えられる。反対に、減少率が最も少なく、最も事故発生件数が多い下肢部については、柔道の競技特性上、負傷リスクが高い。しかし、頭部や顔部とは違い、重大事故につながるリスクは低い部位ではあ

る。その為、安全対策の優先順位は低く扱われている。しかし、柔道事故件数を減らし、安全な柔道指導を目指す為には、下肢部の安全対策は要な課題である。

表1 事故件数の減少率

区分	頭部	顔部	体幹部	上肢部	下肢部	全体
中学 授業	-0.29	-0.25	-0.19	-0.18	-0.18	-0.19
中学 部活動	-0.30	-0.31	-0.23	-0.18	-0.23	-0.22
高校 授業	-0.30	-0.26	-0.13	-0.13	-0.12	-0.15
高校 部活動	-0.23	-0.14	-0.08	-0.04	-0.08	-0.08

3.2 負傷内容の詳細分析

ここでは、統計的検定により、より詳しく負傷の種類や部位ごとの分析を行う。分析対象はJSCが公開している「学校の管理下の災害」⁹⁾から、2018年の中学校、高等学校における柔道の授業及び部活動の疾患を除く負傷事故に関するデータをもとに、学校別（中学校・高等学校）に柔道授業と柔道部活動の2018年負傷事故件数を種類や怪我部位ごと抽出したものである。調査項目については、中学校及び高等学校の柔道の授業及び部活動の負傷事故の種類、部位について調査した。負傷事故の種類については、骨折、捻挫、脱臼、挫傷・打撲、靭帯損傷・断裂、その他（挫創、切創、刺創、割創、擦過傷、熱傷・火傷、歯牙歯折、その他）とした。負傷事故の部位については、頭部、顔部（前額部、眼部、頬部、耳部、鼻部、口部、歯部、顎部）、体幹部（頸部、肩部、胸部、腰部、その他（腹部、背部、臀部））、上肢部（上腕部、肘部、前腕部、手関節部、手・手指部）、下肢部（大腿部・股関節、膝部、下腿部、足関節部、足・足指部）とした。

3.2.1 負傷の種類

(1) 2018年 負傷の種類と比較

①中学【授業 vs 部】の分析

中学校の柔道授業と柔道部活動での発生率を負傷の種類ごとに χ^2 検定を用いて検定した結果、骨折、捻挫、脱臼、挫傷・打撲、靭帯損傷・断裂に有意差が認められた（表2）。

中学授業では、挫傷・打撲と捻挫の割合が高い。これは授業における学習内容による影響が考えられる。授業は中学校学習指導要領に沿って指導されており、受身や、難易度の低い基本となる技を身に付けることができる学習内容となっている。また、生徒の大半は柔道未経験者である。さらに指導する教員が柔道の知識や経験が豊富でない場合も多い。そのため、負傷事故の発生リスクが高い乱取や試合などの実践的な練習よりも、負傷事故の発生リスクの低い受身や基本となる技などが中心の学習内容となる傾向にある。これにより、骨折や脱臼などよりも、捻挫や打撲などの負傷に抑えられていることが有意差の一因であると推察される。

次に、中学部活動では、骨折、脱臼、靭帯損傷・断裂の割合が高い。これは部活動の場合、競技大会を見据えた練習が行われている。そのため、受身や基礎技能を身に付ける練習よりも、乱取や試合などの実践的な練習が主体となっている。また、生徒の勝敗への執着から、合理的ではない強引な攻撃や投げられまいとする無理な姿勢での防御などが、関節や骨、靭帯への過度な負担となり負傷に繋がっていると考えられる。

②高校【授業 vs 部】の分析

高等学校の柔道授業と柔道部活動での発生率を負傷の種類ごとに χ^2 検定を用いて検定した結果、骨折、脱臼、靭帯損傷・断裂に有意差が認められた（表3）。

高校授業では、骨折の割合が高い。これは中学校の授業と同様に、授業における学習内容による影響が考えられる。また、身体の成長による体重や筋力の増加も有意差の一因であると思われる。高等学校学習指導要領では、相手の多様な動きに応じた基本動作から、得意技や連絡技・変化技を用いて、素早く相手を崩して投げたり、抑えたり、返したりするなどの攻防を展開することが求められている。そのため、動作が複雑化し、中学校授業時よりも怪我の重症化にも繋がったことが推察される。

次に、高校部活動では、脱臼、靭帯損傷・断裂の割合が高い。これは中学校部活動同様に、練習の主体が競技に則した乱取や試合などの実践的な練習になっていることと、勝負にこだわった攻防によるもの影響が大きいと思われる。さらに、身体の成長による体重や筋力の増加及び競技技術の習熟度向上により、動きの激しさが増し、関節や身体へ高負荷がかかるリスクが高まったことが考えられる。

③中学校・高等学校における負傷の種類【授業 vs 部】まとめ

中学校・高等学校ともに、部活動における脱臼、靭帯損傷・断裂の事故割合が高くなっている。これは、部活動では主に競技大会を目標に練習が行われており、競技特性に則した、乱取や試合などの実戦形式の練習が中心となっている。また、柔道では、投げる・投げられるといった行為が勝敗を左右する。その為、勝敗への執着から関節に負担となる無理な姿勢での攻防が行われ、負傷事故の発生に繋がっていることが推察される。この点を改善する為には、勝負にこだわるのではなく、競技者が互いの安全を意識することが重要である。合理的な技の応酬を意識し、非合理的な強引な技を掛けたり、無理な姿勢で防御せずに受身を取ることが必要であり、自他の安全確保につながる。

表2 負傷の種類 中学【授業 vs 部】

	骨折	捻挫	脱臼	挫傷・打撲	靭帯損傷 ・断裂	その他
中学授業	2801	1963*	226	2048**	326	111
中学部活動	1824**	1083	174**	999	244**	79

$X^2(5) = 54.869$, $p < .01$
 $+p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

表3 負傷の種類 高校【授業 vs 部】

	骨折	捻挫	脱臼	挫傷・打撲	靭帯損傷 ・断裂	その他
高校授業	1330**	1426	402	1493	609	122
高校部活動	846	1057	335*	1029	524**	108

$X^2(5) = 24.846$, $p < .01$
 $+p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

3.2.2 負傷の部位

(1) 2018年 怪我全体部位の比較

①中学【授業 vs 部】の分析

中学校の柔道授業と柔道部活動での発生率を部位ごとに χ^2 乗検定を用いて検定した結果、頭部と上肢部

に有意差が認められた(表4)。また、事故件数については中学柔道授業の下肢部が突出して多い。原因としては、前項で述べたとおり、柔道は対戦相手と至近距離でおこなう競技であり、力を抑制せず相手に直接接触する形式の競技である、フルコンタクトスポーツである。対峙者との間合いが近い為、下肢が接触することが多くあり、技術の熟練度の低い者は、接触の機会も増え、負傷事故につながっていると考えられる。

次に、中学授業では頭部の事故割合が高くなっている。それは投げられた際に、受身がうまくとれずに、頭部を畳に衝突させることが原因であると考えられる。柔道では、投げられた時の衝撃を緩和し、頭部が畳に激突するのを防ぐために、最初に受身の指導を行う。しかし、授業では、ほとんどの生徒が柔道初心者だが、授業数が限られており、受身のスキルが未熟のまま投げ技や実践形式の練習に移ることで、事故発生割合が高くなっていると考えられる。こういった状況を踏まえ、授業で指導する際の留意点としては、受身練習の強化と指導方法の見直しではないだろうか、従来柔道の現場では受身をする際、受身の形や頭を打たない為に、帯の結び目を見るなどの外観の指導が主に行われている。しかし、受身の衝撃でその形を保持できないことが問題であるため、その指導法だけでは不十分である。本来受身で重要なことは、全身を使い衝撃を和らげることにより、このことを念頭に置き指導することが有効と思われる。また、これに加え頸部筋力強化も必要である。

また、中学部活では上肢事故の割合が高い。これは部活動では勝負に熱中するあまり、投げ技を掛けられた際に、投げられることを防ぐために、畳に手をついたり、組み合った状態で無理に捻るなどの、無理な防御姿勢になることによる影響が予想される。また、上肢については、投げ技をかける際に、無理な姿勢で技をかけることで、肘関節などに負担がかかり事故の発生に繋がっていることが考えられる。これらを防ぐためには、無理な防御姿勢を取らないことや、合理的な投げ技の掛け方が大切であると考えられる。

②高校【授業 vs 部】の分析

高等学校の柔道授業と柔道部活動での発生率を部位ごとに χ^2 検定を用いて検定した結果、頭部に有意差が認められ、授業での事故割合が高かった(表5)。また、事故件数については、高等学校柔道授業の下肢部が多い。これらは、中学校の分析結果と同様の理由が考えられる。

③中学校・高等学校における怪我全体部位【授業 vs 部】まとめ

中学校・高等学校ともに、授業における頭部の事故割合が高くなっている。これは柔道の技術が未熟なまま、授業が発展していくことで、事故の発生に繋がっていることが考えられる。この点を改善する為には、指導方法や手順の見直しが重要である。また、投げられたときの衝撃を和らげるための技術である受身について、教員は再認識する必要がある。受身では、体全体で衝撃を逃がすため、その調和がポイントとなる。受身本来の効果を引き出すためには、受身の外見に囚われるのではなく、衝撃を逃がすために行う動作であることを念頭に置いて指導する必要がある。

表4 怪我全体部位の比較 中学【授業 vs 部】

	頭部	顔部	体幹部	上肢部	下肢部
中学授業	622**	317	2101	1846	3026
中学部活動	243	172	1213	1251**	1804

$X^2(4) = 45.656$, $p < .01$

+ $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

表5 怪我全体部位の比較 高校【授業 vs 部】

	頭部	顔部	体幹部	上肢部	下肢部
高校授業	332**	262	1501	1242	2499
高校部活動	183	215	1069	964	1837

$X^2(4) = 13.453$, $p < .01$
 $+p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

(2) 2018年 中学 怪我詳細部位の比較

中学校・高等学校別に柔道授業と柔道部活動の2018年負傷事故件数を怪我部位全体について χ^2 検定を行った結果、中学校・高等学校ともに柔道授業での頭部事故の割合が高かった。ここではさらに武道必修化が導入されている中学校に焦点を絞り、柔道授業と柔道部活動の2018年負傷事故件数を怪我部位別に χ^2 検定を行った。

①中学顔部【授業 vs 部】の分析

中学校の柔道授業と柔道部活動での顔部事故発生率を部位ごとに χ^2 検定を用いて検定した結果、有意差傾向はあったものの、5%水準で有意差は認められなかった(表6)。

中学校の顔部事故件数については、統計的有意差は見られなかったものの、柔道授業の眼部が多い。原因としては、眼部への手指などの接触が考えられる。前述の通り、柔道はフルコンタクトスポーツである。互いに柔道着の襟や袖を握り、技をかけるため、襟を握る際に、顔付近に手が接触することがあり、特に柔道経験の少ない初心者などに多く発生する。また、口や鼻などの他の部位に比べ重症度の高い事故が起こる可能性がある部位であることも件数の多い一因ではないだろうか。

表6 怪我詳細部位の比較 中学顔部【授業 vs 部】

	顔部							
	前額部	眼部	頬部	耳部	鼻部	口部	歯部	顎部
中学授業	8	144	10	23	52	16	35	29
中学部活動	10	63	4	18	31	10	28	8

$X^2(7) = 12.606$, $.05 < p < .10$

②中学体幹部【授業 vs 部】の分析

中学校の柔道授業と柔道部活動での体幹部発生率を部位ごとに χ^2 検定を用いて検定した結果、頸部と肩部、胸部に有意差が認められた(表7)。

柔道授業において、頸部・胸部の割合が高い。これは柔道技術の未熟さが要因であると考えられる。技をかけられた際に受身をうまくとれない場合、首から落ちやすく負傷に繋がる。また、技をかける側(以下、取)の技が未熟の場合、バランスを崩し、技をかけられた側(以下、受)と共に、倒れることがある。この際、取が受に覆い被さる形になることで胸部や頸部に負荷が掛かり、負傷に繋がったと思われる。この場合、体重差が怪我の重症度にも影響すると思われる。また、中学校の体幹部事故件数については、柔道授業の肩部が最も多くなっており、上記と同様に、取の技の未熟さが負傷事故の要因となっていると考えられる。柔道の勝敗をきめるポイントは背中が畳へ着く姿勢によって異なる。このことから、背中を畳につけないため

に、体をひねるなどして、肩から畳に落ちたりするケースがある。このことから、肩の負傷を防ぐ為には、取の正しい技と、受の潔い受身が重要となり、正しい受身の習得と取と受のそれぞれの配慮が必要であると考える。

表7 怪我詳細部位の比較 中学体幹部【授業 vs 部】

	体幹部						
	頸部	肩部	胸部	腹部	背部	腰部	臀部
中学授業	513**	882	217*	18	43	386	42
中学部活動	170	642**	96	14	19	248	24

$X^2(6) = 68.540$, $p < .01$
 $+p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

③中学上肢部【授業 vs 部】の分析

中学校の柔道授業と柔道部活動での上肢部発生率を部位ごとに χ^2 検定を用いて検定したが、有意差は認められなかった($\chi^2(4) = 7.480$, ns)。

④中学下肢部【授業 vs 部】の分析

中学校の柔道授業と柔道部活動での下肢部発生率を部位ごとに χ^2 検定を用いて検定した結果、膝部と足・足指部に有意差が認められた(表8)。

柔道授業において、足・足指部の割合が高い。また、件数についても、足・足指部が突出して多くなっている。この点については、前項でも述べたが、柔道は対戦相手と至近距離でおこなう競技であり、対峙者と足が接触することが多くある。また、柔道はすり足で歩く為、足指が畳に引っかかることで負傷事故がおこる。特に技術の熟練度の低い初心者によく発生しやすいことが考えられる。

部活動においては膝部の割合が高くなっている。柔道は攻防の中で回転運動が多く行われる。特に背負投や払腰等の技をかける際には、軸足を中心に体を回転させ、技を仕掛ける為、膝には他の部位に比べ外力が加わる機会が多い。その為、部活動では勝負に熱中するあまり、無理な姿勢で技をかけることや、無理な防御姿勢をとることで、膝関節に負担がかかり、事故の発生に繋がっていることが考えられる。

表8 怪我詳細部位の比較 中学下肢部【授業 vs 部】

	下肢部				
	大腿部・股関節	膝部	下腿部	足関節	足・足指部
中学授業	149	503	204	671	1499**
中学部活動	77	399**	145	441	742

$X^2(4) = 41.686$, $p < .01$
 $+p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$

4. まとめ

本研究では、2014年から2018年までの学校管理下における柔道事故による、負傷部位と負傷の種類を分析し、その結果から中学・高等学校別の柔道授業及び部活動の柔道事故傾向と特徴から、柔道教育のあるべき姿について検討することを目的とし研究を行った。

その結果、次の4点の特徴と課題が明らかとなった。

- ①学校管理下における柔道事故件数は、年々減少傾向にあった。また、部位別でも同様に減少していた。しかし、事故発生件数の最も多い下肢部の減少率は最も低かった。これは、減少率の高かった頭部は顔部と比較すると、死傷事故や重い障害を残す重大事故に直結する可能性が低い為、文部科学省や全日本学生柔道連盟による安全対策においても優先順位が低く扱われていることが一因である。この為、柔道事故件数を減らし、安全な柔道指導を目指す為には、下肢部の安全対策に取り組む必要がある。
- ②中学校、高等学校別の授業と部活動における負傷の種類を比較した結果、中学校、高等学校の部活動においては、脱臼、靭帯損傷・断裂の事故割合が共通して高かった。これは、柔道の競技特性上、部活動では実戦形式の練習が中心となっている。また、柔道は投げる・投げられるといった行為が最も勝敗に影響を与える為、合理的でない技や関節に負担のかかる姿勢での攻防が負傷の一因である。この為、競技者自身が競技特性を理解し、自他の安全確保を考慮した練習に取り組めるようにさせる指導が必要である。
- ③中学校、高等学校別の授業と部活動における負傷部位を比較した結果、中学校、高等学校の授業においては、頭部の事故割合が共通して高かった。これは、相手に投げられた際に、身体の負傷を防ぐ技術である受身を含む柔道の基礎技術の習得が未熟なまま、授業が発展することが負傷の一因である。この為、限られた授業時間数で生徒自身が身体の負傷を防ぐことのできる、基礎技術を習得させる指導法が必要である。
- ④武道が必修化されている中学校の授業と部活動における、各負傷部位をさらに詳細に比較した結果、体幹部と下肢部において有意差がみられた。体幹部では、授業での頸部と胸部、部活動での肩部の割合が高かった。また、下肢部では、授業での足・足指部、部活動での膝部の割合が高かった。負傷要因として、授業では、受身のみではなく、足の運び方や技の掛け方などの基礎技術の習得が未熟なことがあげられる。柔道は対峙者と至近距離でおこなう競技のため、些細な失敗から、生徒同士が接触したり、ともに倒れることで負傷事故がおこる。さらに、この際に生徒同士の体格差があることで、重症度にも影響を与える。この為、まとめ③と同様に柔道における攻防の基礎技術を正しく習得させる指導方法の考案が重要である。部活動においては、競技大会に出場することを前提として練習が行われており、単純な基本動作よりも、様々な動作を複合的に使いながら実践的な練習を実施する傾向にある。これにより、関節部に負担がかかる動作や姿勢をとり、関節部に過負荷がかかり事故がおこっている。この為、まとめ②と同様に自他の安全を選手自身が配慮し、練習に取り組む意識付けが重要である。

5. 今後の課題

本研究では、学校管理下における柔道の負傷事故の傾向と特徴を明らかにした。しかし、これらの負傷事故がどのような状況で負傷に至ったのかは明らかではない。また指導者自身の危険意識についても明らかにされていない。そこで今回のような負傷事故の件数だけではなく、次のような分析も必要であろう。

- ① 実際の柔道事故事例に基づいて分析し、事故発生状況の傾向について把握すること。
 - ② 柔道事故に対する危険意識について柔道指導者や教育現場へのアンケート
- 以上のような分析を通じ今後柔道事故についてさらに理解を深める必要がある。

柔道を安全で安心できる武道教育の一つとする為に、柔道事故の発生を抑え、選手・生徒たちが安全に安心して柔道を習得できる、新たな教材や指導方法の作成とその実践が求められる。

注)

本論文は2020年度芦屋大学修士論文『学校における柔道教育の在り方—体重の違いに注目して—』の一部を元に、新たな分析を行い、加筆・修正したものである。

参考・引用文献

- 1) 内田良：柔道事故，河出書房新社，2013.
- 2) 文部科学省：柔道の授業の安全な実施に向けて，2014.
- 3) 藤澤健幸，平野武士，持拓身：高等学校における柔道の負傷事故に関する研究—中学校との比較から，スポーツ科学研究，13，57-73，2016.
- 4) 藤澤健幸：中学校における柔道の負傷事故に関する研究—負傷事故の傾向と特徴からの安全対策—，スポーツ科学研究，12，84-100，2015.
- 5) 独立行政法人日本スポーツ振興センター：学校の管理下の災害 [平成27年版] 平成26年度データ，2015.
- 6) 独立行政法人日本スポーツ振興センター：学校の管理下の災害 [平成28年版] 平成27年度データ，2016.
- 7) 独立行政法人日本スポーツ振興センター：学校の管理下の災害 [平成29年版] 平成28年度データ，2017.
- 8) 独立行政法人日本スポーツ振興センター：学校の管理下の災害 [平成30年版] 平成29年度データ，2018.
- 9) 独立行政法人日本スポーツ振興センター：学校の管理下の災害 [令和元年版] 平成30(2018)年度データ，2019.